バカとテストと召喚獣+FGO バカ達との学園生活

蒼雷海

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理焼却事件、四つの事件、人理漂白事件を勝ち抜いた藤丸立香は、高校を卒業するために学校に通いたいと言うマシュを連れて一時、カルデアと契約サーヴァント達に別れを告げて故郷の文月市に戻ってきた。

これは、文月市にある文月学園で立香とマシュがバカ達と学園生活を送る物語。

初作品です。突然思いついて書き始めたので何時まで続くか分からない＆失踪する可能性が大いにあります。（消す可能性もあります）

それと、タグにも書いてありますが不定期更新で文章力は全くないです。
それでも「良いよ」や「構わない」という方は、どうぞゆっくりしていってください。
なお、完全に作者の自己満足小説なので批評などは受け付けておりません。ご了承ください。

目次

第一問　新たな始まり ―――― 1
第二問　作戦会議＆Dクラス戦 ―― 12
設定 ―――――――――― 24

第一問　新たな始まり

「準備は出来た？マシュ」
「はい、準備できました先輩」
　マシュの登校準備が出来たことを確認した俺は玄関のドアを開けた。
　俺が今いるのは某県にある文月市。人理焼却事件、四つの事件、人理漂白事件を終えた俺はカルデアの人たちやサーヴァントたちと一時の別れを告げて故郷であるこの町に戻ってきた。
「まさかマシュが俺と同じ高校に通いたいって言うとは思わなかったよ」
「ご迷惑でしたか？なら今すぐカルデアに戻りますが・・・」
「迷惑だなんて思っていないさ。ただ、俺が通う文月学園は特殊だからね。一般的な普通の学園生活を送ることは出来ないと思うよ？」
「確か、科学とオカルトと偶然から生まれた試験召喚獣システムというのを使って自分のテストの点数に見合った召喚獣を召喚して戦うというやつでしたね。今から楽しみです」
「そうそれ。よく覚えているねマシュ。文月学園は二年生から学年ごとに上位のＡから

下位のFの6クラスに分かれていて、マシュが今言った召喚獣を使って行うのが試験召喚戦争っていう疑似戦争でクラス代表を討ち取って勝利したクラスと敗北したクラスの設備を入れ替えることが出来るんだ。敗北したクラスは三か月間戦争を仕掛けることが出来ないデメリットもつくね」

「命を懸けた戦争じゃないから良いんですが、でもそれだと仮に敗北した上位クラスの人たちは一生懸命勉強して良い設備のクラスに入れたのに悪い設備に替えられてしまうなんて、なんだか可哀想な気がします」

「気持ちは分からなく無いけどね。でも藤堂カヲル学園長に言わせると、良い点数を取ったからって何時までも勝者でいられるほど現実は甘くない。負けた事を何時までも引きずってないで次こそは勝てるように努力することさね。だってさ」

「そうなんですか。あ、先輩。学校が見えてきましたよ。誰か立っています」

「ん?ああ生徒指導員の西村先生か。何やってんだろ」

どうやらお喋りしながら歩いていたら学校に着いたみたいだ。学園近くの住宅街に住んでいるとはいえ、端っこの方だから着くまでにもう少し時間が掛かると思ったんだが意外とそうでもなかったらしい。

俺はマシュと一気に坂を駆け上がって門の前に立っている西村先生に声をかけた。

「西村先生おはようございます。何をやっているんですか?」

「おはようございます」
「ん？藤丸に君は確か編入生のマシュ・キリエライトだったな。おはよう。藤丸から聞いているかもしれんが俺は生徒指導員の西村宗一だ。今はクラス分けの紙を配っているんだ」
「そうなんですか。あれ？でもそういうのって普通、掲示板に張り付けておくものじゃないんですか？」
「キリエライトの言う通りなんだがな。まあ大人の事情というやつだ。ほら二人の分だ」
　そう言いながら西村先生は俺たちに折りたたまれた紙を渡してくる。
　それを同時に開封してクラスを確認した結果・・・俺たちはＦクラス。つまり最下位のクラスだった。
「まあこうなる事は分かっていたんだけどね。試験受けてないんだし」
「すみません先輩。私のせいで・・・」
「気にしなくていいよマシュ。むしろ俺はマシュと同じクラスになれて嬉しいさ」
「そ、そんな先輩。恥かしいです（顔を赤らめながら）」
「マシュ・・・」
「先輩・・・」

「コホン。お前たち仲が良いのはいいんだが。そういうのは時と場所を考えてだな」
いかん。思わず二人だけの世界に入りかけたようだ気を付けないと。
「す、すみません西村先生」
「ごめんなさい。西村先生」
「まあいい。キリエライトは職員室に行って担任の福原先生に挨拶をしてくるといい。藤丸、案内頼んだぞ」
「分かりました西村先生。マシュ、こっちだよ」
俺はマシュを職員室に連れて行こうとするが西村先生が「ああ、そうだ」と思い出したように声をかけてきた。
「藤丸。バイトで何があったかは知らないが一年の時より心身共にずっと頼もしくなったように見えるぞ」
俺は振り返って「ありがとうございます」と言って改めてマシュと職員室に向かって行った。

それから職員室に行ってマシュを福村先生に会わせると教科書の受け渡しなどがあるというので一旦、分かれて俺は自分のクラスである2―Fにやってきていた。
「ここが2―Fか。一年の時は来なかったから分からなかったけど確かにAから順に設

備の質が下がっていくな」
「ドアの前で何をしておるんじゃ？」
「ん？秀吉か。久しぶりだね。なにFクラスはどれだけ設備の質が悪くなっているんだろうなと思っただけさ」
　今俺に話しかけてきたのは中学から付き合いのある親友、木下秀吉だった。男なのにアストルフォやデオンみたいに、女性にも見えるから一部では性別・秀吉として扱われている。俺は普通に男として扱っているけど。
「久しぶりなのじゃ立香。流石に必要最低限に勉強できる環境にはなっておろうぞ」
　それもそうだなと言いつつ教室のドアを開けるとまだ誰も来ていないみたいだったが、その設備の質に思わず唖然とした。
「こ、これは・・・」
「ふむ。教卓と黒板、ロッカーは別として他はまるで寺子屋のようじゃな」
　藤丸が絶句し、秀吉が冷静に教室の感想を言う。
　教室内はまだ誰も来ていないようだが教卓と黒板、ロッカーを除けば、卓袱台に座布団と畳があり秀吉の言う通り寺子屋のようだった。
　ただし、教室全体がボロボロでまともに使えるかどうか怪しいところではあるが。
「席は決められてないみたいだし取り敢えず座ろうか」

「そうじゃな。では其処に座ろうぞ」

俺と秀吉が座って数分後。後からやって来た同級生達が次々と教室の質の悪さに文句を言いながらも席に着いた頃、このクラスに来るであろう一人がやって来た。

「おはようございまー」

「早く座れこのウジ虫野郎‼?」

「酷‼? 誰だそんなこと言う奴はって何だ雄二か。何してんの?」

「先生がまだ来ていないみたいだからなクラス代表の俺が教卓に立ってみた」

「二人とも早く座ってください」

「はーい」

どうやら福原先生も来たらしい。マシュは居ないみたいだけどドアの前に人影が見えるから呼ばれるまで待っているんだろうな。

「え〜、担任の福原ですよろしく。設備確認をと言いたいところですが、編入生を紹介します。マシュ・キリエライトさん入って来てください」

「分かりました」

ガララ

「初めまして皆さん。外国から来たマシュ・キリエライトといいます。日本に来てまだ日が浅いですが、よろしくお願いします（ぺこり）」

「「かっ可愛い――――!!!」」
「なんだあの胸の大きさは?!さいこ（鼻血ブシャー――!!!）」
「嘉元!?しっかりしろー!!」
「一目惚れしました！俺と結婚してください!!!」
　うん分かってたけど、やっぱりこうなったね。あと最後の奴は後で体育館裏に来い。
「はいはい皆さん静かにしてください。キリエライトさんはそうですね・・・そこの藤丸君の左が空いてるので其処に座ってください」
「分かりました」
「先輩、改めてよろしくお願いしますね」
「こちらこそよろしくね」
「なんじゃ、お主ら知り合いかの？」
「そうだよ詳しいことは後でね」
「分かったぞい」
「では、設備の確認をします。何か不備はありますか？」
「先生、窓が割れてて隙間風が寒いです」
「我慢してください」
「先生、座布団の中身がスカスカなんですが」

「我慢してください」
「先生、卓袱台の足が折れたんですが」
「これで直してください（コトッ）」
マジで大丈夫かこの教室?!しかもあれ木工用ボンド?自分で直せってか。
「他にも不備があれば自分で何とかしてください。それでは自己紹介をします。私の名前は福原です。一年間よろしくお願いします」
それからドア側から一人一人が自己紹介をしていって俺の番になった。
「藤丸立香です。ぐだぐだした展開が好きな男なので、ぐだ男と呼んでくれてもいいです。よろしくお願いします」
その後最後まで自己紹介が進んで終了すると福原先生は、自己紹介中に壊れた教卓の修理工具を取りにいったん、教室を出て行った。
それとは別に明久と雄二も出て行ったが直ぐに戻ってきて、とんでもないことを言い出した。
「皆！突然だが聞いてくれ！Ｆクラス代表として提案させてもらう」
あ、嫌な予感が・・・
「俺達Ｆクラスは試験召喚戦争を行う！」
嫌な予感が的中した――――!!!!

「「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!???」」」
「無理に決まってんだろ！」
「勝てるわけがない!!」
「代表のバカさに絶望した！」
うん。そりゃ皆も驚くよね後、最後の人、思いっきり睨まれてるぞ。
「安心しろ！勝てる見込みはある！先ずは島田だ！彼女は数学だけならBクラスレベルの成績だ！次は秀吉！あの木下優子を姉に持ち本人もそれなりの点数を持つうえに得意の演劇での攪乱も期待出来る！次にそこで女子のスカートを覗こうと躍起になっている土屋！彼は何を隠そうあのムッツリーニで保健体育だけならAクラスでも上位の成績を持ち、情報操作ならお手の物だ！あとは姫路はAクラスレベルの成績だ。あとは・・・立香だ！」
雄二が怒涛の勢いで主戦力となる名前を上げていき、その中には俺も含まれていた。
・・・え？俺？
「彼は少なくとも総合科目でBクラス上位に入れる成績を持つ！そして、最後は明久だ!!彼はなんと、観察処分者だ!!」
「「「な、なんだってー!?」」」
「都市伝説じゃなかったのか？」

「絶望した！」
「ちょっと雄二！なんで言うのさ」
　雄二は明久の文句を無視して話を続ける。
「観察処分者を侮るな！デメリットとして召喚獣が受けた痛みの何割かを受けることになるが、雑用などでその操作能力の高さは学年一位とも言える!!これだけの面子がいれば戦い方次第でいくらでも勝てる見込みはある!!」
　そして雄二は大きく空気を吸って言う。
「皆！この設備に不満はないか!?今言ったばかりだが、戦い方次第ではいくらでも勝てる見込みはある!!そして、それはＡクラスの設備を手に入れることだって夢ではないということ!!我々は最下位だ！学園の底辺だ!!誰からも見向きもされない屑の集まりだ!!だがそれは、もう失うものが無いということ!!だったら駄目もとでやろうじゃないか!!試験召喚戦争を!!」
「「「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!!」」」」
「先ずは手始めに明久、Ｄクラスに宣戦布告をしてこい」
「それ、僕がボコられるだけだよね?!」
「そんなの映画だけだ。いいから行ってこい!!!!」
「分かったよ。ったく・・・」

明久は渋々出ていき、しばらくすると・・・

「騙されたーー!!」

ボコボコにされた状態で戻ってきた。

「雄二、明久をからかうのも程々にしておけよー」

俺は一応、雄二に注意をしておいた。

「へいへい分かったよ立香。それより主力メンバーは屋上で昼飯を食べながら作戦会議だ」

雄二の提案で俺たちは昼飯を持って屋上に向かった。

第二問　作戦会議＆Ｄクラス戦

午後からのＤクラス戦に向けての作戦会議を行うために、俺たちは昼飯を持って屋上へと向かった。

「さて、本題に入る前に立香。キリエライトとはどういう関係なんだ？キリエライトは編入生なのにさっきからやたらと仲が良い上に、先輩呼ばわりまでされている」

「あ、それ僕も思ってた」

「うむ。儂も思っておった」

「・・・羨ましい」

「確かに気になるわね」

「良ければ教えてくれますか？藤丸くん」

昼飯を広げながらの雄二の質問に皆んなの視線が俺とマシュに集まる。

因みに、上から雄二、明久、秀吉、土屋、島田、姫路の順だ。

こうなる事は分かっていたので、俺は直ぐにマシュに事前に打ち合わせしていた通りの内容を話すぞと意味を込めたアイコンタクトを送り、マシュは軽く頷いた。

「え、と。姫路は知らないだろうけど、明久たちは一年が終わる頃に俺が外国にバイトを

しに行くって言ったのを覚えてる？」
「ああ、確かそんなこと言っていたね。」
「募集人数が一人とか言ってたやつか」
「そうじゃったな」
「・・・覚えてる」
「そうだったっけ？」
「学校帰りに一回だけ言っただけだから、覚えてなくても無理はないか。簡単に言うと、マシュはそのバイトの後輩でね。同じバイト仲間としてよろしくねって言ったら慕われるようになって、それで仲良くなったんだ。」
「次は私が話しますね。私は諸事情で他者と接する機会があまり無かったんですが、偶々参加したバイトで立香さんに出会い、その時に色々なことを教わって人生の先輩として先輩と呼ぶようになったんです。それと、自己紹介の時に言い忘れてたんですがマシュでいいですよ」
「なるほどな。それで仲が良いというわけか」
「・・・納得」
「分かったよ。よろしくねマシュさん」
「分かりました。よろしくお願いしますね」

「へー、そんなことがあったんだ」
「ふむ、演劇のネタとしてありかのう」
どうやら皆、納得してくれたようだ。
悪いと思ったが、カルデアや人理修復のこと等は秘密なので誰にも言うわけにはいかない。
あまり深く聞かれてボロが出るかもしれないし、ここはさっさと話しを替えてしまおう。
「俺とマシュの関係の説明はこれくらいでいいよね。それで雄二、なんか作戦はあるの？それと、なんでEクラスからじゃないんだ？」
「ああ、作戦は今から説明するが今回は勝利とは別に景気づけとして派手にやって士気を高めるのも目標だ。Eクラスを先に攻めないのは上位クラスとはいえ、俺たちFクラスとあまり点数の差がないからあまり召喚獣の操作の熟練度を高められないということと、こんなところで躓くようならAクラスに勝利することは夢のまた夢になるからだな」
「なるほど。雄二の言う事にも一理あるね。でも最初から主力メンバー全員で総攻撃ってわけじゃないんだろ？」
「そうだ。状況によって少し変えるが基本的には姫路の回復試験の終了まで耐える作戦

で行く」
「私ですか？」
「そうだ。他クラスにうちの主力が早々にバレることになるが何時かはバレることだからな」
「ちょっと待ってよ雄二。姫路さんなら回復試験を受けなくても点数高いじゃないか」
「普通ならな。だが俺たちが最後に受けた試験はいつだ？」
「何時って・・・あ」
「私は途中で退室してしまったので０点なんです」
「そうだったわね」
「そういうことだ。だから姫路が回復試験を終えるまでの間、島田、秀吉、明久には各部隊を率いて時間稼ぎをしてもらう」
「分かったわ」
「頑張るとするかのう」
「了解だよ」
「次にだがその前にマシュは試験召喚獣の操作経験は？」
「説明だけ受けて実際に動かしたことはないですね。あと、すいません振り分け試験当日に熱で休んでしまって０点なんです」

「俺もだ」
「分かった。なら今回は回復試験を受けた後に、立香に操作方法を教わりながら後方で打ち漏らした敵を叩いてくれ。ムッツリーニは大変だろうが二人の回復試験終了までの間、情報収集しつつ後方で頑張ってくれ」
「・・・了解した」
「ひとまずこんなとこだな。さて昼飯食べようぜ」
作戦会議が終了し昼食を食べようと母さんが作ってくれた弁当を開けようとするがマシュが固まっているのに気づきその視線の向く方を見る。
「あの、吉井さん。その手に持っているのはなんですか?」
「え?僕のお昼ご飯だよ」
「いえ、水と塩にしか見えないのですが」
ああ、そういえばマシュは明久の生活事情を知らなかったか。
「ほっといていいわよマシュ。アキの自業自得なんだから」
「マシュよ。明久はゲームや漫画が大好きでの。生活費のほとんどをそっちに使っておるのじゃ」
「・・・何時も水と塩ばかり」
「失礼な!砂糖だって食べているさ!」

「あの、吉井君。それって食べているとは言いませんよ・・・・・・」
「少しは生活を改めろと前から言っているだろうが」
「そ、そうなんですか」
　説明しようとしたしたけど全部言われたか。マシュがひいちゃってるよ。というか明久の評価ボロボロだなぁ。全て事実だから否定はしないけど。
「あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」
「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」
「はい。明日のお昼でよければ」
「良かったじゃん明久。ひとまずこれ２つあげるから今はこれで我慢して」
　そういって俺は弁当箱に４つ入っていたおにぎりのうち２つを明久に渡す。
「ありがとう立香！」
「あ、先輩でしたら私のサンドウィッチをあげます」
　マシュが自分の分の弁当箱からサンドウィッチを渡そうとするが俺は首を横に振る。
　マシュの弁当も母さんの手作りなのだが中身が大きく違い、俺のが和風なのに対して洋風だ。
「ありがとうマシュ。でも大丈夫だから。しっかり食べて回復試験頑張ろう」
「そうですか。分かりました。マシュ・キリエライト皆さんのお役に立てるように頑張

らせ貰います」

☆

「これより回復試験を始めます。この試験の結果が召喚獣の戦闘力となります。３人とも用意はよろしいですか？」

「「はい」」

午後になりＦクラス対Ｄクラスの試召戦争が開始された。俺、マシュ、姫路は空き教室で高橋先生から回復試験を受けていた。

試験科目は総合科目。雄二からは適当な放送で合図を出すから俺とマシュはそれまでになるべく点を取っておいてくれと言われた。

カルデアにいた頃に時折、英霊たちに勉強を教わっていたからか今のところ全ての答えが分かった。これならば今までで一番高い点数を取れるんじゃないかと思う。まあ、歴史なんかは間違えるわけにもいかないんだが。

チラッとマシュや姫路を見てみるとマシュはそれほど早くはないが一問一問正確に解いているみたいで、姫路は元から頭が凄くいいからか高速で次から次へと問題を解いていっている。

俺も頑張らねばと少し解く速度を上げるがそこへ一瞬ハウリングするような音が聞こえた。

ピンポンパンポーン《連絡致します》

《船越先生、船越先生》

《二年Ｆ組の吉井明久君が体育館裏で、船越先生を待っています》

《生徒と教師の垣根を超えた一人の男と一人の女としての大事な話があるそうです》

待て。適当な放送で合図を出すとは聞いたがもしかしてこれ？分からないけど他に聞いていないし今の放送が合図だと信じて回復試験を終わらせよう。なんか遠くで明久の叫び声が聞こえるし。

立ち上がり解き終わった試験用紙の束を高橋先生に見せるとその場で素早く採点をしてデータをパソコンに入力していく。それを見ているとマシュもきりが良いところまで解き終わったらしく、同じように高橋先生に見せた。

「これで藤丸君の点数が召喚獣に反映されました。試召戦争頑張ってください」

「はい」と答え教室を出る。ムッツリーニを探すとＥクラスの前で見つけた。

「おまたせムッツリーニ。戦況は？」

「・・・・・来たか立香。押され気味。少し前に島田が清水と相打ちになって補習室に送られた」

「了解。もう少しで「先輩!お待たせしました」来たからここは任せて」
「・・・・・・分かった」
忍者のような動きで土屋が消え、Ｄクラスの人が２人やって来る。
「悪いけどこっから先は俺とマシュが相手をするよ。サモン!」
「マシュ・キリエライト。初戦闘頑張ります。サモン!」
召喚陣が現れそこからカルデア戦闘服と極地用のカルデア制服と通常のカルデア制服を足して３で割ったような姿で両手に銃と手甲が合わさった手甲銃を着けている俺の召喚獣とその隣から何時もの戦闘時の姿のマシュの姿をした召喚獣が出現する。
化学
Ｆクラス　藤丸立香３５７点＆Ｆクラス　マシュ・キリエライト３６０点
ＶＳ
Ｄクラス　冬林樹１１２点＆Ｄクラス　鈴木達郎６０点
「なっ!?何でＦクラスの奴がこんなに点が高いんだよ!」
「クソ!とにかくやるぞ!」
Ｄクラスの２人が驚く。俺もここまで点が取れてるとは思わなかった。
「マシュ。召喚獣の基本操作は音声と思考によって行うんだ。先ずは見てて」
そう言って召喚獣に指示を出して冬林に一気に接近させ殴りつける。

Ｆクラス　藤丸立香３５７点　　ＶＳ　　Ｄクラス　冬林樹６３点

殴られた敵の召喚獣は後ろに飛ばされる。もう片方が剣で斬りつけようと接近するが回避して殴った召喚獣に銃弾を撃つように思考し、それを受けた俺の召喚獣が思考通りに避けて態勢を立て直していた召喚獣に銃弾を撃ち込んだ。

Ｆクラス　藤丸立香３５７点　　ＶＳ　　Ｄクラス　冬林樹０点

「０点になった戦死者は補習ーーーー!!!」

「げぇっ!?嫌だーーー!!」

相手の召喚獣が０点になると同時にやって来た西村先生が走って来て戦死者を担いで行ってしまう。

「こんな感じかな。自分より小さくて怪力の存在を操るから操作は難しいけど慣れるとスムーズに動かせるようになるから」

「分かりました」

俺の召喚獣を後ろに下がらせてマシュの召喚獣がぎこちなく前に出てくる。

「何だそのぎこちない動きは?俺にチャンス到来ってか!」

敵がチャンスだと思ったらしく一直線に突っ込んでくる。

「私の召喚獣、盾を前に出して相手に突っ込んでください!」

マシュに指示された召喚獣がヨタヨタと走りながら動き相手に激突する。

敵の召喚獣は弾き飛ばされて当たり所が悪かったのか目を回した。
「ああー！しっかりしろ、俺の召喚獣！」
Ｆクラス　マシュ・キリエライト３６０点　　ＶＳ　　Ｄクラス　鈴木達郎４０点
「チャンスです！」
マシュの召喚獣が走り出して盾を敵の召喚獣の頭に向けて振り下ろす。
Ｆクラス　マシュ・キリエライト３６０点　　ＶＳ　　Ｄクラス　鈴木達郎０点
「０点になった戦死者は補習ーーーー!!!」
「嘘ーー!?」
西村先生によって補修室に連れていかれる戦死者を見送る。
「初勝利おめでとうマシュ。今のような感じで戦っていけば問題ないよ」
「ありがとうございます先輩。ですが偶然です。頭では分かってはいても実際に動かすと上手くいかないですね。もっとカッコよく決めたかったのですが」
「それについては練習あるのみだね。先生に頼めば時間によっては練習させてくれるから。おっと次の敵が来たようだね」
「引き続き頑張ります！」

☆

戦争は終盤へと突入し両クラスの代表が本体を連れて相対する。俺とマシュも近衛兵としてＤクラスの生徒を迎え撃つ。

そこへ、平賀の背後から声がかかった。

「え？姫路さん。Ａクラスの君がどうしたの？」

「その・・・Ｄクラスの平賀君に現代国語で勝負を申し込みます」

「・・・はぁ。どうも？」

「えっと・・・さ、サモンです」

現代国語

Ｆクラス　姫路瑞樹３３９点

ＶＳ

Ｄクラス　平賀源二１２９点

「え？あ、あれ？」

「ご、ごめんなさい」

平賀が戸惑っている間に姫路の召喚獣が大剣で討ち、２年初の試召戦争はＦクラスの勝利で幕を閉じた。

設定

設定

１：ＦＧＯ内での時間は少なくとも第二部まで終わっている。（細かい事はあまり気にせずご想像にお任せします。）

２：バカテス内での時間は原作通り。ただし、ＦＧＯ第一部と第二部によって２年間空白になっているので全員原作より２歳上がっています。

３：これから先、ＦＧＯの話の展開がどうなるかは分かりませんが、この作品では色々あってロマンと所長は生き返っています。（登場する予定はあるが何時になるかは不明）

４：クリプターの人たちは何人か出せたら出す予定です。少なくともカドックとオフェリアは出せたらいいなと思っています。

５：適当な理由で殆どのサーヴァントは残っている。（勝手に抜け出すサーヴァントがたまにいるが、余計な混乱を防ぐために基本的にはカルデア内かその周辺にいる）

６：腕輪の能力は黒金などの特殊な腕輪以外は同じ能力でも使用者ごとに性能が少し異なる。

例えば「熱戦」の能力を姫路が使うと直線状に強力な熱戦を放つが、立香が使うと自身の周囲に熱戦を放つ。

キャラクター

藤丸立香

この作品の主人公。ぐだぐだした展開が好きな男なので、ぐだ男とも呼ばれる。一般人でありながら、世界を救った人物だが秘匿されておりそれを知る者は勘の良い一部の魔術師などを除いてほとんどいない。お気楽な性格でその者の行いに怒りを感じることはあっても、その者を心底嫌いになることはあまりない。

召喚獣

カルデアの戦闘服と極地用の制服、通常のカルデアの制服を足して3で割ったような服装で手甲銃を装備している。

腕輪

守護霊召喚

通常は１００点を払う毎に守護霊を一体召喚して迎撃させる能力なのだが、立香の場合は守護霊ではなくカルデアにいるサーヴァントがランダムで召喚獣と同じくらいの大きさで召喚される。（数体までなら腕輪発動と同時に真名を念じることでそのサーヴァントを呼ぶことが出来る。勿論、サーヴァントの意思で動ける）

マシュ・キリエライト

立香のヒロイン。立香が日本に帰国する時に、前々から学校に通ってみたかったという理由で立香の家に居候という形で日本に来た。しかし、初めての試験勉強に励みすぎた結果、試験当日に熱を出して休んでしまいその看病で試験を休んだ立香に申し訳ないと思っている。（立香は気にしていない）

召喚獣

デミサーヴァント時の姿に盾

腕輪

城塞

通常は城塞を召喚して数秒間だけ進行を食い止めるだけだがマシュの場合は宝具である「いまは遙か理想の城」が発動し味方が受けるダメージを大きく減らす。２０秒毎に２０点消費する。

英霊たち

立香が契約しているサーヴァントたち。普段はカルデアで待機しているが、立香の召喚獣が持つ腕輪の能力で召喚されることを知ってからは面白がって自身が召喚されるのを期待しながら待っている。

原作と設定が異なるキャラクター

木下秀吉

立香と同じ中学。原作と同様に演劇が大好きだが、立香が姉の優子に勉強を教わりに何度か家を訪れているので、自分もそれに付き合い（優子に強制的）それなりに勉強は出来る方である。

試験当日は覚えた事を忘れない内に一気に書いたが確認を忘れた結果、誤字脱字などの多数のミスでFクラスになった。

木下優子

立香のヒロインの一人（予定）。中学の時に何度か同じクラスで、何度か席が隣だったために立香と仲良くなった。実は立香に仄かな恋心を抱いていており、何度か勉強を教えるという名目で自宅に呼び、共に居られる時間を密かに喜んでいたのだが、バイトから帰って来た立香がマシュ・キリエライトという、優子にとって強力なライバルを連れて戻って来たので内心、かなり焦っている。

弟である秀吉の演劇好きには呆れているが応援している。